

水平社宣言とわたし

我々が工タであることを誇り得る時が来たのだ



これは水平社宣言の一節です。
身分制度がなくなりてからも部落差別はなくなりず、
1922年3月、自ら部落差別をなくす運動を繰り広げ
ようと全国水平社を創立しました。その際に読み上げられ
たのが「水平社宣言」です。

水平社宣言は、長い間、迫害の中にあっても、やべての
人間の自由と平等を求めたマイノリティ当事者による
世界初の人権宣言とも言われています。
この一節は、あえて自らが差別された言葉を使い、「私は私である」と強い意志を表し、差別する側へ強烈な訴えを行つてゐるのです。

下を向くことなく、胸を張って

わたしは学校を卒業して大人になつても、部落差別を
身近な問題としてとりえておらず、部落差別は本当に
残つてゐるのだろうかと思つていました。しかし、教員

その時わたしは

この話を聞いた時、部落差別について本当のことを何
も知らない自分に気づきました。わたしは、部落差別の
歴史や言葉の意味だけを教えることだけで分かつて
いました。

「知つてゐるつもり」「やつてゐるつもり」になつて
いた自分が氣づいたのです。
生まれ育つた地域や自分自身に誇りをもつて生きてほ
しいと願う親の姿。それに一生懸命応えようとしている
子どもの姿。部落差別と向き合つてゐる親子の前で、部
落差別の現実を見つめず、差別をなくすために何もして
いないわたしがそこにいました。

母親が自分の子どもに「あなた自身、そしてあなたが
生まれ育つたこの地域に自信をもつて生きてほしい」と
願う思いこそ、水平社宣言に通じるものです。

水平社宣言が訴えようとしたことが現実の姿として、
わたしに問い合わせてきた瞬間でした。

そして、「先生には聞いてほしい」と言ってくれたこ
とやこんなわたしを信じてくれたことがうれしく、この
思いに必ず応えなければと強く思いました。

水平社宣言発祥の地に立つて

数年前、水平社発祥の地を訪ね、
水平社創立に向けて当時の若者たち
が集まつていた高台に立ちました。
高台から見える遠くの風景を眺め
ながら、今から百年前その地に立
ち、全ての人間の尊敬を願つた若者
たちの熱い思いが伝わつてくるよう
に感じ胸がふるえました。



水平社宣言は、わたしに部落差別に向き合つとはゞつ
いうことなかにひいて問い合わせました。

わたしは、人としての誇りをもつて生きようとする
人々の姿に学びながら、「差別をしない、させない、許
さない」社会をつくる一人として生きていくべきだと思
います。

*工タといふ言葉は、江戸時代の身分制社会の中では、差別され
いた人たちに対し使われた差別語です。この言葉は、1871
年、明治政府によって廃止する通達が出され現在に至つていま
す。水平社宣言の中では、今まで社会を支える仕事をし、自由
と平等を求める命をかけて差別と闘つてきた者の誇りを示すもの
として、あえてこの言葉が使われています。

スマートフォン等で読み取ると、水平社宣言の原文と
中学生向けに要約した宣言文を見るることができます。

になり、研修や様々な人の出会いを通して、現在も部
落差別があることや差別意識はなくなつていることを
知りました。それでもまだわたしは、どこかで部落差別
の現実を感じることができました。

そのような中、ある親子と話す機会がありました。母

親はわたしに、

「先生、あんまり誰にでも話してならぬど、先生には聞
いてほし」。

私が職場で、住んでゐる所を訊うと、次の日から私と
話す人がぐつと少なくなると。こんな経験を何回もし
てきました。こんな経験は、私だけじゃなく、この地区的
人は多く経験している。
だから、子どもには自分のことや自分が住んでいる地
域のことを、下を向かずに胸を張つて堂々と話せる子
に育つてほし」と願つてゐるの。
何も悪いことでも、隠すことでもなじでしよう。
ここで生まれようじ、ヒーリング育との差別をされた
ために生まれてきた人はいないから。」
母親は、ゆっくりと穏やかな口調で話してくれまし
た。隣で聞いていた子どもは、母親の顔を見つめながら
大きくなずいていました。